文化や生活環境を超えて仏様の教えを広めていきたい

Heart Beauty Salon

サトリのココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法――

日蓮宗開教師
野田寛行さん

第34回

のだ・かんぎょう　1976年生まれ、和歌山県出身。桃山学院大学在学中にカナダとイギリスに留学。帰国して桃山学院大学を卒業後、立正大学仏教学部に編入。2001年に日蓮宗の教師資格を取得。2002年、日本・ドイツ・イギリスにて開教師の研修を行う。2003年よりロンドンに赴任。2007年にマレーシアに異動し、現在までアジア広域において布教活動を展開中。

私は和歌山県で父が住職を務める日蓮宗本光寺の長男として生まれました。大学在学中に、世界のいろいろな価値観を見たり経験したいと思い、カナダとイギリスに1年ずつ留学しました。

渡英中、精神的に落ち込んでいるときに、街の中の仏教寺院にフラッと入り、お坊さんの話を聞いたのです。そのとき、仏教とは生活に密着しているものなのだ、と気づかされました。それまでの私は、自分の生まれ育ったお寺のことをまったくわかっていなかった。もっと深く仏教のことを知りたいと思い、帰国後に立正大学に編入して2年間仏教を学びました。

イギリスでの体験は、私に「仏教を心から勉強したい」と思わせてくれたもの。その国で仏様の教えを広めていけたら……そんな思いから、海外で布教活動をする「開教師」を志しました。

ペナン島では家族のように信徒とコミュニケーション

2003年、開教師としてイギリスへ。約4年間、ロンドンを拠点にノルウェーやオランダなどで布教を行いました。その後、2007年からは東南アジアに。マレーシアのペナン島を拠点に、シンガポールやインドネシアなどを訪問して布教活動を行っています。

東南アジアの信徒さんは仏教信仰にとても熱心で、お寺に来るのが大好き。「お寺のために何かしたい」という意識が高いので、お寺の掃除に来てくれたり、私が男一人で生活しているのを心配してごはんを作ってくれたり。毎週日曜日の朝はお寺でお経をあげて法話をしますが、その後は各家から食べ物を持ち寄ってみんなで食事をします。

お寺が一つのファミリーのような感覚でいる人が多いのです。何か困っているときは、お寺に来てみんなで分かち合う。お互いの悩みを話し合って、分かち合いながら成長していく……お寺はそんなコミュニティの中心なのです。

お寺と信徒の和を保ちながら布教を続けていきたい

開教師の活動は忙しくて、ときには「自分がもう一人いれば」と思うこともあります。でも信頼関係はface to face。時間をかけてでも、互いに顔を合わせて会話するように努めます。私はそういう時間を大切にし、地域に根をおろし、現地の習慣や生活を理解したうえで関係を深めていきたいと思うのです。

国や文化、生活習慣は違っても、仕事や将来のことなど、みんな不安を抱えています。そして助けを求めてお寺にやって来ます。私はお釈迦様の教えを的確にガイドすることで、そんな人々の支えになりたい。お坊さん一人では何もできません。信徒さんと一緒に何かをやり遂げることで、みんなに活力を与えたいと願っています。

東南アジアでの布教活動の拠点でもあるマレーシア・ペナン島の一念寺。信徒の多くは華僑の方々です。

撮影／光川十洋　取材・文／本木頼子　デザイン／黒田志麻